

母へ

岡山市立高松中学校

三年生 池田悠人

学校の帰り道、雨脚が強まる中、徒歩通の僕は友達と速足で帰っていた。停まっている母の車が目に入った。僕はさらにペースを上げて歩き、そのまま通り過ぎようとした。車の窓を開け、母は声をかけてきた。

「車乗って帰る？」

恥ずかしく思った僕は、

「そんなことせんでええって。」

怒った口調で言い、無視するように歩いた。

「じゃあ友達も乗ってってあげるわ。」

中々引き下がらない母。母はいつもこういうのだ。雨が降った日は僕を迎えに来る。心配性でおせっかいな人だ。

一人で帰っているときには乗ることもある。しかし、友達と一緒にときにはやめてほしい。

「僕が頼んだときにだけ迎えに来てや。」

そう言ったところで聞くはずない。

「中学生は荷物が多いから」

「傘を持ってなかったら困るだろうから」

と言って、全く聞く耳を持たないのだ。

部活に入って間もない頃、同じ部活の友達が傘を忘れたというので僕の傘と一緒に入れて帰ることにした。いつもとは別の道を通ることになるのだが、恐らく母はまたあの場所で車を停めて僕が通るのを待っているだろう。だが、それは考えないようにした。

いつもより少し時間がかかって家に着いた。しかし、母はまだ帰っていない。

まだ待つとるんかな。でもそのうち帰ってくるだろう。

それから少しして帰ってきた。廊下をどすどすと歩いて僕の部屋に入ってくるなり、

「どっから帰ったん。」

と、びっくりした面持ちで聞いてきた。

「他の道から帰った。」

あっさり答えた僕に、今度は少し怒った口調で、

「なんで他の道から帰るん。」

と言う。自分の帰る道に文句を言われる筋合いはないと腹を立てた僕は、

「別に今日は迎えに来てって言ってないし。そんなん言うんだったらもう今度から迎えに来んでいいから。」

と、きつく言ってしまった。

母は、悲しそうな顔をした。

「分かったわ。もう何があっても迎えに行かんから。」

そう言い残し、部屋を出ていった。その姿を見て僕ははっとした。苛立って、つかつかとなり言ってしまったことを後悔した。しかし、僕には僕なりの考えとプライドがある。だから何も言わなかった。

それから当分の間、母は一度も迎えに来なかった。

毎朝母は、僕が学校へ行く前に必ず確認してくることがある。

「忘れ物ないん。」

「宿題やっとなるん。」

いつも面倒臭く、僕のことを信用していないように思えて腹が

立つ。だからよく、学校へ行く前に言い合いになり、怒ったまま家を出る。

今年、僕は受験生だ。母は僕が勉強をしているといつも聞いてくる。

「計画どおり進んどるん。」

「塾に通わなくてもいいん。」

僕は自分で計画を立てて勉強している。しかし、少しでも計画通り進まなかっただけで口うるさく言われるのだ。色々口出ししてくることに嫌気が差し、また言い合いになる。

よく言い合いになるのは母が全て悪いと思っていた。母の考えは理解できないし、偉そうに言ってくるのは納得がいかなかった。

ただ、あの日を境に僕の考え方が少し変わった。

大雨の降ったある日のこと。僕は学校に傘を持って行き忘れた。生憎、友達も僕より先に帰っており、仕方なく濡れる覚悟で走ることにした。

こんな日に迎えに来てくれればいいのに。

淡い期待を持ってチラリと見た先に、一台の車が目に留まった。母の車だ。そう思い近寄ったが、プレートナンバーを見て

落胆した。以前はこんな雨の日、必ず母が迎えに来ていたものだ。

「はよ乗られ。びしょ濡れじゃが。」

そう言って車に乗せてくれたのに。

そのときのことを思い出していると、もう迎えに来なくていいなんて言わなければ良かったと後悔した。それと同時に、あのとき母に向けた言葉のひどさを痛感した。

僕はただ都合がいいのだ。母の過保護すぎる部分も問題だが、それにいつまでも甘ったれているようではいけない。そう気づかされた。

僕は初めて、母に今まで言ってきたことを思い返した。毎朝僕の忘れ物を確認することも、勉強の進み具合を聞いてくることも、全ては僕が困らないためなのだ。

家に帰って、僕はあの日のことを母に謝った。すると母は笑って言った。

「いつもの道を帰って来んかったから心配したんよ。でも、理由があつたのことだったらいんよ。」

僕は、さらに自分が情けなくなつた。てっきり別の道を通って帰ったことに怒っていたのだと思っていたが、母は僕のことを

心配してくれていたのだ。そんな母に対して、僕の言動を思い返してみると本当に申し訳ない。

いつも母と言ひ合いになるとときには、母は僕に対する思いやりから様々な注意や心配をしてくれる。しかし、僕はといったらそんな気持ちを無視して、自分のプライドを守るために反抗しているだけだ。

このことから母に対する考え方が変わった。今までは母の言っていることが理解できず、自分の言っていることの方が正しいとばかり思っていた。いや、違う。理解しようとしていなかったのだ。母の行動が僕を思つたものだったとしても、僕が母に対して思いやりを持っていなかったら、言ひ合いが起きて当然だ。

僕はこの先、尖り合うのではなく、思いやりを持って話していこうと決めた。心配してくれる人がいるということは、とても幸せなのだ。

ただ、一つだけ。母は自分の過保護さについて少々自覚してほしい。